

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 空 蝉

挿絵 光 星

序章	
第一章	その名はローズマリー
第二章	乳白色の呪い
第三章	血の契約
第四章	精飲姫マリー
第五章	闇夜を統べし者
終章	
	251
	199
	148
	112
	070
	016
	006

## 登場人物紹介

Characters



### ローズマリー

強大な力を持つ女吸血鬼伯爵。八十年以上も人が立ち入らない居城の主。

### セリーヌ

魔力によって動く自動人形。マリーの身の周りの世話をこなす。

### ベイリア男爵

人類の完全奴隷化を唱える過激派吸血鬼の首領。

### イメルダ

ベイリアの妹。兄よりも優れた戦略家。

### クオン

吸血鬼ハンターの少年。吸血鬼に父母を殺された過去があり、その存在を強く恨んでいる。

「感じてなど、あふうんっ！ おら……ぬ。はひっ、ひう……ンンう！」

口にした言葉が嘘であると、彼女自身が熟知していた。成熟した肉体が牝としての悦びに咽んでいるのだと、永き時を生きてきたマリイが気づかぬはずがない。

「肌も張りがあつてツヤツヤ。せつかくの乳液が弾かれてしまひそう……」

お遊戯に興じる子供のように嬉々として、娘たちが擦り寄ってくる。無論玩具代わりとなるのは女吸血鬼の見事な肢体だ。露わとなった胸や濡れて透ける股間のみならず、耳や唇、うなじも腋も。ありとあらゆる性感の存在部位をやわやわと撫でられ、生ぬるい乳液を擦りつけられる。狂おしいほどのじれったさに太腿はさらに強く擦り合わされて、挟み込んだ娘の指を自然と奥へ奥へと誘う形となる。

「ふふふ。そんなに焦らなくてもちゃあんとクチュクチュしたげるよう」

あどけない少女の顔に淫蕩な娼婦の表情を乗せて、娘はころころと笑い転げながら指を蠢かせてくる。年端もいかぬ少女の、女の快楽の機微を知り尽くしたその動きに翻弄される身体が、情けなくも恨めしい。中でも双乳を弄ばれると、尋常でない快楽信号が全身を駆け巡った。乳液を、最も丹念に塗りに塗り込められたせいなのかもしれない。

（くそ、こんな小娘どもにいいようにされるなど……ッ）

食いしばった唇の内で、力を失い縮んだ牙がギリギリと軋んでいた。銀の弾丸により失った力さえあれば——自城でイメルダに受けた痛みと屈辱とが脳裏に甦り、マリイの薄く

小ぶりの唇に余計に力がこもった。

「あら、そんなに噛み締めては歯が痛んでしまうわあ。ほおら、お願いですから可愛いお口をお開けになってくださいましなあ……」

「やめる、やめ……んんんう！ あむうっ！ むぐむおお……ッ！」

唇を撫で擦っていた女が、おもむろにピンクのルージユで彩られた唇を押しつけてくる。舌の侵入を拒もうときつく閉じた唇の肉をはむはむと咀嚼され、ぷるんとした感触を味わい尽くされる。決して強引に口腔に押し入ろうとせず、過敏な乳肉を揉みしだき刺激を絶えず加えながら、焦らしに焦らししておいて獲物自らに唇を捧げさせるつもりなのだ。

（唇はそう簡単に奪わせるものか。唇だけでも、守らねば……いや、守ってみせるっ）  
吸血鬼のシンボルたる牙のある口腔は、当然彼女の中でも特別な位置づけにある。そう易々とくれてやるわけにはいかない。確固たる意志の元、なお一層唇を噛み締めて、淫靡に這わされる舌の侵入を頑なに拒み続けた。

「あらあ。もう、強情なお方ですわねえ」

ちっとも残念がっていない様子で、だらけた声を垂れ流す女。それに追従するように、群がる女どもも我も我もと矢継ぎ早に喋りたて始めた。

ようやく訪れた束の間の安息にも、胸の疼きは一向に止まらない。硬く勃起した乳首は乳頭ごと引き上げるようにぷくりと膨張し、さらなる刺激をねだるかの如くピクピク小刻

みに震えている。イヤらしい——自分の胸を見て、そう感想を抱いたのは初めてだった。

「ねえねえ。先に儀式を済ませちゃおうよお」

「そうねえ。そうすればこのじゃじゃ馬なお嬢様も、少しは大人しくしてくれるかも」

「そうしましょうよ。ねえ、ご主人様あ、いいでしょお」

耳元で口々にまくしたてる女たちに半ば閉口しながらも、マリーは刺激で麻痺しかけた頭で懸命に聞き入った。逐一聞き漏らさずに僅かでも情報を探り出そうと試みる。

（儀式とは、何なのだ。この乳液で私の力を奪い、弄ぶだけではないのか……？）

最後の娘が発した台詞に従い、彼女たちの主であるベイリアの姿を探す。湯煙の向こうで、銀髪が揺れる。痩せぎすの肉体が、煙が晴れると共に露わとなった。彼は備え付けの専用椅子に腰掛けて、下僕と捕虜の痴態を楽しんでいた。

「クク、よかろう。その女に、枷を嵌めてやるがいい」

その視線は微動だにせず裸体の群れの中央、乳液まみれとなりすっかり透けてしまったマリーの、白い薄布の下の肢体へと絡みついている。恐らく一時も目を離さないでいたのだろう、切れ長の細目は瞬き一つせず食い入るように紅い眸の女吸血鬼を凝視していた。

その股間、雄々しく反り返った肉棒の幹には、またしても二人の女がかす傅き、すがりつくように磨き上げられた肢体の全てを投げ出して、熱心に主に対する奉仕を行っていた。

（くッ……なめられたものだ。だが、このままでは……。枷とは、一体なんなのだ？）

「ああ、ご主人様のおペニス、素敵ですわあ……」

思案を続けるマリーの耳に、女の漏らす艶かしい声が響き渡る。室内で反響する声は、まるで延々と淫靡な見世物を垂れ流されているかのようにすら思えてくる。嫌悪する男の性行為など見たくなかないのに、疼く身体が火照りどうしても目が離せないでいた。

「下衆な男め。今度は何を企んで……あひいあああん!？」

男爵たちの狂態に見入っていたせいで、反応が一步遅れた。突然の快感に自分の身を振り返れば、気づかぬ間に二人の女が再び乳液まみれの肢体を擦りつけてきていた。反撃を試みようにも、もうすでに両手足をがっしりと押さえ込まれている。致命的なまでに反射神経と判断力が失われてしまっていた。

「んふふう。大きなおっぱいさん……」

「ポヨンポヨンしちゃいましょうねえ」

「くうああッ! さ、触るな下郎……ッ!」

長い髪を高い位置で結んだ若い娘と、これまでの下僕の中では年長と思しき褐色の肌が目を引く女。二人に両脇を抱えられる形で、マリーの豊かに実った双乳が揉みしだかれる。もちろん、その手にはたつぷりとあの乳臭い魔の白濁液が乗せられていた。

(乳首ばかり、弄りおって……もどかしい、股の間が疼いてえっ……)

乳首を捻られ硬く小指の先ほどにまで膨らんだ二つの敏感突起を、左右それぞれの女の

指がシコシコと扱きたてる。もどかしく、少しずつ昂りをみせる粘着質な快感。弄くられた爆乳は、見る間に勃起した乳首を中心に乳白色に染められていった。

「すごおい。ぷくつとしてて芯が硬くて……お乳の周りまで熱くなってきたよお？」

「ええ。なんて淫乱なお乳なんでしょう。くす、気持ちよさそうな顔してらっしゃるわ」

玩具のように乳首を弄くられ、反撃すらできない。つくづく惨めな己を再確認する。なまじ高い自尊心を持つ高位のヴァンパイアであるだけに、打ちのめされた衝撃もまた余計に大きなものとなった。人生で初といってもよいほどの強烈な無力感。

胸が、熱い。体温が低めな吸血種にあつて、異常な上昇を見せているのは間違いなかった。じんじんと疼く胸の内、何かがドクドクと脈打ち始めているのが感じられた。その未知の感覚に、女伯爵の口から弱気の言葉が突いて出た。

「はあっ……乳首はっ、もう弄るで……いああっ！ ……ないいっ」

乳肉に乳液をたっぷりとまぶされ塗り広げられる中で、唯一動く唇だけが、襲い来る悦楽に対し懸命に抗いつけている。

「ああん、これでは我らが主様にお仕置きされてしまうわあ……」

「ご主人様のお仕置き……考えただけでお腰がガクガクしちゃうよう……」

お仕置き、とつぶやいた少女の声は嬉しそうに弾み、その視線は肉棒掃除を楽しむベイリアへと陶然と注がれていた。そのあどけない面に浮かんでいるのは心底嬉しそうな、け

れども表情の全くない虚ろな笑みだ。褐色の女も概ね同様の様相である。

どちらもしこった剥き出しの乳首を挿んだマリイの腕へと擦りつけて、ひっきりなしに喘いでいる。二人の娘の乳首は驚異的な膨張率で親指ほどにまで膨れ上がり、先端がぱっくりと割れて透明の汁を零していた。

「な……そ、それは母乳……？」

女たちが妊娠をしているようには見えない。それは体型からも明らかだった。けれど、確かに乳から吹き出るその液体は過敏な彼女の鼻孔に甘い匂いを届けてくる。

「お乳、出ちゃったあ。あたしのエッチなピンピン乳首からあ」

「おふうううん……、気持ちいいわあ……」

喘ぐ女たちはマリイの腕へと全身を擦りつけ、なおかつマリイの乳房へと気持ちよさげに噴き出した己の白濁乳液を塗りつける手を一時も休めないでいる。

甘ったるい香りに思考力を徐々に奪われ、頬を朱に染める女吸血鬼の肉体にも、程なくしてある異変が現れた。

（なんだ……胸が……疼きが止まらないっ、すごく熱いのが溢れてえ……ッ！）

「クク、ようやく効果が現れ始めたようだな」

湯煙越しに、ベイリアの嘲笑が響く。幾度も反響する声に、まるで大嫌いな男に何度も嘲りを受けているかのように思えてくる。声を聞くにつれ、胸の奥で感じていた何かが迫

り上がって来るような感覚が、押しとどめきれなくなってきた。

供物の変化をつぶさに見て取った女たちが、さも可笑しそうに忍び笑いを漏らし、再び肌をすり寄せてきた。年嵩の女奴隷が、意味深な笑みを貼りつけたままの表情で膨張した乳首へと湿った唇を伸ばす。

「うふ、もうすぐですわあ……ちゅぷうっ」

「くひああっ!? や、やめよ、この……あつあああ！ な、なにか……ち、乳首がつ!?」  
熱い。焼けそうなほどに熱く強烈な何かが、胸を揉まれ、女の唇に吸われ、肥大した乳頭を扱きたてられるそのたびに、脈打ちながら駆け上ってくる。収まらぬ脈動は逆にどんどんと大きくなり、内側から乳肉を圧迫されているかのような錯覚を受ける。乳腺がヒクヒクと蠢いているのを、はっきりと自覚していた。

何か、得体の知れないものが自分の肉体に襲いかかろうとしている。正体の知れぬ刺激から逃れるように、紅き眸がぎりりと敵をねめつけた。

「で、出るウ……はひィ、何をつ、何をしたッ……ベイリアアアッ……!」

徐々に限界を超えつつある快楽の喘ぎをどうにか口の中に押し込め、必死に搾り出した声音は震えていて恐ろしく心もとなかった。これが自分の声なのだ信じられないほどの弱々しい、牝のか細き鳴き声。

「それは……ネッ!」

「こういうことですわぁン！」

主人の代理とばかりに、脇を固めた二人の女がそれぞれにマリーのたわわな巨大乳肉を驚掴みにし、先端の突起をぎゅむぎゅむと力一杯に摘んで搾り上げる。繰り返し乳肉を乱雑に揉まれ、乳首といわずに乳頭ごと扱きたてられながら、嬲られる彼女は、胸の内部で何か未知の熱い塊が出口を求め大量に滞留していくのを感じ取っていた。

「ああひあああああつ!? む、胸があつ……ダ、ダメッ。で、出てきちゃうううッ！」

掴まれた乳肌の奥が、じん、じんと疼く。堪えきれぬほどの甘美が掌に余る乳肉のみに集中し、内側から何かか肉を突き破って出てくるのではないか、そんな錯覚すら覚えた。

歯を食いしばりどうにか平静を保とうと努力する。けれど乳奥から駆け上ってくる刺激はどんどんと強まり、乳房全体が熱に侵されたように火照って、もどかしさを全身へと伝えてくる。もう、限界はすぐそこにあった。

「我慢する必要なんてありませんわぁ。ほら、お出しになって……」

——ぎゅっ、ぎゅうううう！

「ひつくうう……！ だ、ダメええ……出る、熱いのがあ……出てしまううう！」

ぷくりと腫れ上がったかのように突出した乳頭が、丹念に扱かれるたびにぶるりと大きく震え跳ねる。ぱくぱくと口を開いた乳首の奥、胸の内側で渦巻く熱い何かが迫り上がってくるような異常な感覚。乳肉を中心に痺れが奔り、身悶えが止められない。そして、



口々に母乳の批評を下しながら、周囲を囲む女どもがこぞってマリリーの母乳で濡れる胸へと手を伸ばす。先着の特権を得ていた左右の女は自らも母乳を吹き零しながら、その白みがかつた汁でベタバタの掌をヴァンパイアの腕や脇、胸にまで塗り広げていく。

「おふああつ……やつ、はああうう……ミルクが、私のミルクがあ……ッ」

悦楽にまどろむ中、やつと出した声は酷く掠れて弱々しいものとなっていた。今や紅玉の魔眼の爛々とした輝きはなりを潜め、だらしなく開いた口腔に覗く牙も一層に短くなつてしまっている。

「クハハハッ、それこそがその乳液風呂の効能！ マリー、お前は母乳を噴き散らかしてははしたなく喘ぎ、乳汁と共にエネルギーを漏らすのだよ！ もう貴様に力はない。『魔の紅玉』と恐れられた、伝説のヴァンパイアはもういないのだッ！」

高らかに勝利宣言を行うベイリアの言葉に、ようやくこの儀式の全貌を知る。この湯に浸かった時点で、いや眠っている間に乳液を塗布されてしまった時点で、もうとつづくに勝敗は決していたのだ。

こずるさといった点においてのみ異常に頭が回る目の前の下衆は、真っ先に勝利を確定させた上で敗者をいたぶり続け悦の境地に入り浸っていたのだった。

（我慢するのだ……！ このような屑男の前で、痴態を晒すなどオ……ッ！）  
胸を強く握られると、痛みよりも快楽が上回る。平素の何倍にも高められた性感が、娘

たちの好奇の視線が、成熟したヴァンパイアの感情を刺激し押し上げていく。懸命に噛み締められた口元が、どうしても淫靡に歪んでしまうのを防がないでいた。

「はひああうん！ もう、もう胸えっ、弄るでない……ッ、くふおおああアッ！」

「ふん、何という下品な顔付きだ。さすが俺が見初めた女。至高の紅玉、淫蕩のヴァンパイアだ……おお、もつと舌を絡ませるのだ……ッ！」

一族でも彼女のみの特色である薄紫の長髪を振り乱し、なりふり構う余裕もなくよじられるその裸身からは甘く濃厚な香りと共に母乳が撒き散らされる。

その都度舌を出して美しい顔を歪めて悶える稀代の美女の媚態に、嗜虐心をくすぐられた男爵のモノはどんどんと硬度を増していく。奉仕を続ける下僕の娘たちにさらなる行為を要求し、股間で蠢く二つの頭を髪束ごとグリグリと肉棒へ押しつける。

「んぶぶうんっ！ ごひゅじんさまあ……」

「おいひいれふ、おペニスおいひくて、たまらなあい……！」

どんな要求にも悦び咽び泣いて応じる奴隷どもに一瞥をくれてやり、男の視線は再び宿敵の女吸血鬼へと振り戻された。散々辛酸を舐めさせられてきた、あの圧倒的な魔力の持ち主を己の意のままに觸ることができなのだ。瞬きの間も惜しんで、ベイリアはマリーの一挙手一投足に熱い視線を注ぎ続けた。

「はひっ……ひああうん！ 胸ええッ！ おっばいが止まらないイイツ、くふあああああ

ンンッ！ ……ひ……ぎゅううううううううッ！！」

——びゆる！ びゅびゅびゆるうううーッ！

男の視線の先では、哀れな供物のように下僕に群がられた女吸血鬼が再び淫蕩の乳搾りに晒されている。両脇から伸ばされた手のみならず、正面や背後からも娘たちの手が伸ばされ、それら全てが大きく張った乳房のみに集中していた。男爵が仕込んだ性技の全てを駆使し、彼女たちは魔の紅玉と呼ばれた高貴なる女を追い詰めていくのだ。

「イってらっしゃるのですねえ。すごいわ、潮吹きならぬ、乳噴きだなんて」

「クハハ、そうだろうとも。あれだけの量を塗り込められたのだ。体力に劣る人間どもならば、快樂死しても可笑しくないのだからなあ！」

楽しくて堪らない——男爵は長年の鬱憤を解き放つようにはしゃぎ、笑い転げた。いつも頑として信念を曲げず、融通の利かぬくせに実力と美貌を兼ね備えた当代最高のヴァンパイア。己が全霊で挑んでも歯牙にもかけられずにいた存在が、今や眼前で無様に、淫らに喘いでいるのだ。男爵の高揚した精神を表すかのように肉棒は天を突き、龟头冠部は赤黒く膨れ上がって存在を誇張していた。

（下衆め……ッ！ ……このような辱めで、墮とされてたまる……ものかあ……ッ！）

牙を失い、紅玉の煌めきも失ったマリーは胸の内でも毒づく。また、それが今の彼女にできる精一杯の抵抗でもあった。肉体は尋常ならざる快樂に支配され、屈服しきってしまった

ていた。弱体化を免れた強靱な心だけが、必死に抵抗をやめないでいるのだ。

「さあ、もう一度おっぱいからミルク飛ばしちゃいましょねえ」

「貴方のもつても濃いからあ、このお風呂に一杯になるくらいまで搾り取ってあげるう」

「うふふう。貴方のミルクたっぷりのお湯に浸かれば、もつと綺麗になれるかしらあ」

虚ろな眸に淫魔の色を湛えた女どもが我先にと、二つしかない乳房に殺到する。触れられただけで絶頂に達しそうになる過敏な性感を、揉みくちやにして思う存分乳白色の汁を搾り取るために。女たちの指で泡立ちグチュグチュと卑猥な音を奏でる母乳まみれの乳房は、触れられただけで軽い痛みと、言い知れぬ極上の快楽とを注ぎ込んできた。

「つーかまえましたわあ♪」

——ぎゅうううううっ！

「はぎっ……ぎいうううううッ！ まだ、まだお乳がつ……出ちゃウ……ッ！」

一番年嵩の褐色肌の娘が、紐から零れた乳を器用に根元から搾る。やはり年数を帯びれば円熟の技を得るのか、若い従者たちよりも一步抜きん出た乳絞りの腕を持っていた。乳汁にまみれたヌルヌルの掌でギュギュッと彼女がリズムミカルに乳房を掴み搾るたびに、マリーの肢体を幾度も絶頂の波が襲う。

だらしなくだ漏れとなつて噴き上がる母乳をお預けを食った女どもが競って掬い取り各々の肌へと塗り込める。その都度、女伯爵の肉体からはなけなしの残りカスともいえる



力が抜き取られていった。ビュルビュルと噴出する己のミルクを眺めるその眸を開けるのすら困難なほどに、乳液と母乳まみれの肉体全体を強い虚脱が覆っていく。

「いあ……あつ、あああくうう……。も、もうらめえつ……。やつはあああああああ！」

どくん、と胸が強く高鳴る。ミルクを噴出するたび、身を削られるような疼きと脱力感と、甘く強烈な刺激とがごちゃ混ぜになって全身を駆け巡る。軽い絶頂を繰り返す肉体がわなないている。もうじき大きな波が来ると、直感的に察知していた。

「くく、堪らぬ。あの女が俺の前で！ 乳を垂れ流して、咽び泣いているのだ！ 高慢で不遜な、気高き女ヴァンパイア、ローズマリーがッ……っぐううううううッ！」

——びゅぶぶ！　ぶびゅうううつ！　びゅしゃしゃああつ！　どくどくどくうううつ！

吠える男爵が腰を大きく震わせる。ビクンと跳ねる肉棒から叩きつける白濁汁が、舌奉仕を続ける女たちの顔を直撃した。お預けを食っていた愛玩奴隷の女二人が、ようやく与えられた白濁の餌にちゅうちゅうと啜りつく。

「ああんずるいよお、あの娘たちばかりい」

「こつちにも濃いミルクが欲しいですのにい」

マリーを囲む娘たちは不平を口にしつつも、その手が止まることは決してない。

（ああ、牡の匂い……あの薄汚い男のスペルマの香りがっ……駄目だ、こんなのでイクわけには……イキたく……ないいっ……！）

何人集まろうとも決して誰一人として触れてくれない、股間の茂み。モジモジと擦り合わされるその奥で、疼く陰門が滴るほどに蜜を垂れ流すのを自覚しながら、マリーの背が大きく反らされる。

心底嫌う男爵の精の迸りによる濃密な牡の香りが、否応なく敏感な鼻梁に纏わりついてくる。皮肉にもそれが、引き金となった。

「……っはあ！ はひいひいッ！ あっ！ あおおおオオオオオッ！ッッ！！」

——びゅりゅりゅっ！ びよぶっ！ ぶぶっ……ぶしやあああああッ！

搾られるがままに母乳を噴き散らかし。牙を失った口腔からはしたなく涎を零して、マリーは再び大きな快樂の渦へと吞まれていった。

「クク、これから見物ぞ……まだまだ楽しんでませてもらおう、マリー」

（あ……ふはああああっ……身体、が……もう持た……ぬ……。このまま、では……）

自身のミルクで一層色濃くなった乳液風呂に倒れ込みそうになるのを、女奴隷たちに強引に支えられながら。マリーは途切れそうになる意識を必死に繋ぎ止める中で、自分の荒い息遣いと男爵の狂ったような笑い声を聞かされ続けていた。

時間が勿体ない、そう言わんばかりに青筋浮かせていきり立つ肉棒を、虚ろに喘ぐ口元へと押しつけた。甘いミルクの芳香が、牡のたぎりをより煽り立て増幅させていく。

硬く勃起した肉槍が接着し、喘ぐ少女の口内に牡の濃密な精の香りが充滿した。男はすでに自家発電で一発放っていたらしい。白い液の残骸が滴る肉棒の臭気に、喉の渴きは限界を超え、胸の疼きはヴァンパイアとしての誇りも崇高な志も奪った。

(男の……精液……こつてりと濃いザーメンの匂い……堪らぬ、欲しいイイッ……！)

ただその一念だけを胸に、唇がおずおずと男の肉棒に触れる。待ち望んでいた牡の肉棒に身体は正直に反応し、それだけで脚の付け根からトロリと濃い汁が漏れた。

「くお……ッ!? こ、こいつ口もメチャ巧え……ッ、はお、おおおうっ！」

「んぷうっ、くぶ……ぐちゅちゅう、ぢゅぼ、んふお……」

チロチロと先端を舐めしやぶり、こびりついた恥垢を擦り取る。臭く不潔な香り、幼い肉体を惑わす匂いの元を根こそぎ胃の中へと収めていくのだ。掃除が終われば今度はたっぷり垂らした涎を膨張した肉勃起に塗りたくった。

「おお、おら！ 唾えろって、おお!？」

——ガリッ！

強引に押し込もうとした男の腰が突然の痛みに引き攣る。肉棒の先端が、やけに鋭く尖る歯先に擦れたのだ。

「……つつう！ んだあコイツ。えらく尖った歯してやがる」

牙というには短すぎ、犬歯というにはやけに尖ったその部位は、男のモノで扱われたことにより一層の強烈な甘美な刺激を小さな身体に送り込んできた。

(ひはああつ……どこの誰とも知れぬちんぽで牙を汚されてえつ……悦んでるうつ)

一種の被虐めいた想いが胸の内に根付き始めていた。牙と胸から広がった疼きは全身に転移し、もう抑えようがない。目隠しもあるのだし、正体さえ露見しないのならばそれでもいい——絶えず送られてくる快媚感の波にグズグズに溶かされた少女の思考は、そんな風にも考え始めていた。

「んひやああ！ んぶちゆつ！ ちゅぶぶぢゆつ、んじゆりゆりゆううんんッ！」

「おつ、おおふうつ！ すげえ、コイツ……ガキのちつちえ唇があつ……」

小さな口に収まりきらぬほどの剛棒を喉奥まで咥え込めば、自然と牙が男の敏感な雁を擦る。次第に刺激に慣れてきたのか、男の腰は率先して先の部位を縮んだ牙に擦りつけてきた。男の亀頭と少女の牙。擦れ合ったそれぞれの敏感な部位が激しくビクビクと痙攣してお互いの肉体にまで振動を伝える。

「んんぐうううッ！ ぐじゆぶつ、じゆぽおおつ！ くふあつ……ちんぽおつ、硬いのに突かれてええええつ……ふぐぶぶうううッ！」

「おい、勝手に離すんじゃねえよつ！」

思わず離れた頭を鷲掴みに、男が強引に自分勝手な抽送を行う。感じているのに気づかれ、牙も執拗に擦りまくられた。思い切り開かされた顎が痛い。麻痺しかけた思考を叩き起こそうと、男の腰骨がびたびたと顔面を打った。

「おっ、おお……たまんねえッ。この俺がもう……ッ」

（ああ、出そうになつて……もうすぐ、私の口の中に臭くてきつたない牡汁を嫌というほど出して、飲まされてしまうのだな……！）

嫌悪感を完全に上回った快楽の中。口内で膨れ上がる肉の変化をつぶさに感じ取り、少女の小さな舌先が押し込められた先端の割れ目に捻じ込まれる。ただでさえきつい唇をぎゅつと窄め、男が逃げないように腰に手を回した。さらに喉の奥へと押し込めれば、惨めに縮んだ牙が醜く膨れ上がった肉幹を思い切りに擦り上げる。

「ぐっ……おぐおおおッ！　ぐふうおおッ！」

—— ぼびいいいいイイッッ！　どぼぶりゆりゆううううう！　ぼびゅつ、びゅぶぶう！  
「んもお……ッッ！　んんぐぶうううう……ごぶおおッ！」

白く熱い、激しい濁液の奔流が喉奥と牙を打ち叩く。汚濁を食い止めようと無意識に伸ばされた舌先が龟头を刺激し、余計に多くの汁を受け止める結果となった。

「んぷああ！　ごぶおおううう……！　ぐっ、んんぐくうッ……に、にがいい……っ」

あまりに多すぎる牡の粘性汁が氣道を逆流し、鼻先からも噴き出てしまう。それでもッ

ンとした臭気を堪え、懸命に舌の下部に溜まり続ける白濁汁を喉に絡ませながらも嚙下していった。唇に零れた濁液も残さず舐めしゃぶる。垣間見えた舌先がヌラリと煌めいた。「おお、次は俺だっ！」

上げた視線の先に、ずらりと行列を作った男どもの姿が映る。奴ら全員の精を搾り取れば、どれぐらいの量になるのだろう。一人分だけでは全然足りなかったのだ。あれだけの人数がいれば、きつと喉の渴きも満足できる。そこまで考えれば、自然と喉が鳴った。

(どうせ、正体がばれないのだから……もつと、もつとちんぽを貪りたいッ！)

偽らざる心情を吐露するように小さな唇から精液臭い吐息が漏れる。ちらりと覗く牙は粘る白濁に絡まれて汚れぬめってしまっていた。

「うふふ。みつともない顔ですこと」

「うむ。だが、実にそられる表情だ。まさしく俺のものになるのに相應しい」

現れた主催者兄妹に譲るように、未熟な媚肉に群がる人だかりが綺麗に左右に割れる。銀髪の女吸血鬼は全裸の元ハンターの少年の首輪を引き、兄と共に狡猾な笑みを美しい顔に貼りつけている。

(ふ……あ？ ベイリア……イメルダっ……クオ……ンッ!?)

声と気配を頼りに顔を振り向けようとした刹那。男の甲高い声が拙速に響いた。

「クヒヒッ、それではお披露目と洒落込もうか」

男爵の骨の浮いた指が精臭に咽び鳴く少女の耳を撫で、そのまま後ろへ滑るように這わされる。そして布切れの結び目を解くと、一気に視界を覆う黒布が取り去られた。

「あふうっ……あ？ ひっ、い、いやっ！ み、見るなっ……あぶう……見るなあッ！」

唐突に開ける視界。眩しさと共にまず目に入ってきたのは男爵の嫌味な笑み、次いで闘技場を埋め尽くす男どものけたたましい雄叫びと動揺の表情だった。

どうにか顔を覆おうにも弛緩した手足は使い物にならない。薄紫の髪を引つ掴まれ男爵によつて持ち上げられた美少女の顔の中央で、選ばれし力の証である真紅の眸が輝いている。疑念の渦巻く観客席に向け、奴隷娘の正体がついに曝け出されてしまったのだ。

（知られてしまう。私が、誇り高きヴァンパイアが娼婦の如く見世物にされたと……同族の者たち皆に知れ渡ってしまううっ……いやあああああああッ！）

「だ、男爵殿、それはッ!? こ、このガキはも、もしや」

最後の覆いを取り払われ露わとなった紅玉の魔眼を目にした途端、周囲の墮落した空氣が一瞬で緊迫へと変わる。皆、その真紅の輝きに辛酸を味わわされた者ばかりなのだ。

「そうだと。この小娘は『魔の紅玉』ローズマリィ。人間の肩を持ち、事あるごとに我らに仇なす傲慢不遜なあの子を、ついに反逆の咎の下に召し捕ったのだ！」

少女の紅眼を存分に見せつけ、男爵が声高に宣言する。恐らくイメルダが練ったのであろうシナリオ通りの口調に、聴衆は熱狂し随喜の声を上げた。そして続いての言葉に、そ



犯され、味覚が麻痺しかねないほどに猛り狂う男の欲望。

「あむう……んぢゅっ、ぢゆるるっ！　ぢゅぼっ、ぢゅぼおっ、ぶぢゅうううっ！」  
昂った牝としての肉体と心が、牡の濃厚汁を吸い取りたいと呻いている。押し隠しきれない本心の命ずるまま、舌を不潔な肉幹に絡ませ、亀頭が出し入れされるたびに柔らかな唇で締めつけた。熱くぬめった口内で、男の猛りがますます増していくのを感じられる。

——ガツッ！　ガンッ、ガツツッ！

「むぐぐうううっ！　んふう……ふっ、ふウウウウ……ッ！」

男の突き込みが、短く縮んだ牙を繰り返し叩く。見上げた男の顔は嗜虐の色に染まっている。わざと、故意に牙を責め立てているのだ。

吸血鬼のシンボルであり己の誇りであった牙で味わわされる極上刺激に、打ちのめされた心が屈服する。快楽を、心の赴くままに貪りたい。そうした感情が胸の内を占有した。

「じゅばあっ、ちゅちゅっ、んろお……早くウ、早くこてりのザーメンンう！」

「くそ、この淫乱マゾが！　牙で感じるなんぞ吸血鬼の恥だぜえっ！」

——ぶびゅぐっ！　びゅぐぐぐぐ！　びちゃ、びちちちちちイイイッ！！

「んくふあああああ！　……はひっ、ひくふウ……ぢゅりゅっ！　ぢゅりゅりゅっ！」

思い切り膨らんだ突端から吐き出される粘ついた白濁汁が、牙を直撃する。背筋を反らし軽い絶頂を覚えながらも、決して離すまいと牡器官を挟む唇で締めつけた。自ら顎と舌

を使つて、放たれる汚濁が牙にぶち撒けられるよう調整までしながら。

「おつ、おお！ まだ出る、吸いついてくるッ！」

一滴残らず搾り尽くそうと食欲に吸引する唇の圧力に、腰を震わせ男がまた白濁をぶちまけた。それでもなお、乳にかけられた呪いのせいで疼く媚肉に突き動かされ耐えきれぬ喉の渴きを癒やそうと、小さな舌の動きは激しさを増すばかりである。

「つぶあああああつ！ はひつ、お乳出るううううンンッ！」

——ぶびゆるるうつ！ びよぶうつ！ びゅつ、びゅびゆるるううううッ！

精を注がれ、過剰に勃起した乳首が盛大にミルクを吐き出してしまふ。床に乳溜まりを幾つも作つて、少女は平らな乳肌から母乳を噴き続ける。

「おわ、ミルク臭え汁がかかちまつたじゃねえか。このッ！」

順番待ちをしていた大柄の男が、自分の番が訪れるやそう噛みついてきた。いかつい身体を押しつけ突き込まれた肉棒は、これまでのものより一回り以上大きく括れも太い。

「この糞女が！ てめえのペロで俺のちんぽを綺麗に洗うんだよッ！」

「んふうつ！ ふうンンッ……はあつ、あぶうつ、ぐちゅ、はぶぶウウウ……ッ！」

悪臭もこれまでのものとは比べものにならぬ恥垢だらけの肉勃起が、これでもかと執拗に牙にぶつけられ擦られる。菌茎の根元から牙の表面を肉棒でゴシゴシと扱かれれば、剥離した恥垢が口内の至る所へと飛散し、付着した。

(臭くて……苦いのお……っ。口の中で広がってるう……我慢できないイイ……っ!)  
不潔な老廢物を厭うどころか歡迎するように、懸命に伸ばされた舌先がチロチロとひつきりなしに雁首を舐める。抑えきれぬ欲情に流されるように蕩けた真紅の眸は肉棒のみに集中していた。自ら採みしだいた乳肉を搾り母乳を振り撒きながら、幼い肢体を痙攣させ悦樂を貪り食らう。

「ぐくううう! 俺の溜まりに溜まった濃厚汁……流し込んでやるぞおおおッ!」

——ガツウウンッ!

小さく短い牙に、硬く逞しい肉棒の先端が力一杯に叩きつけられた。

「んぶっ……んひあああ! ひっ、ひはああおおおおおお……ッ!!」

——びゅっばああああつ! どびゅどぐぐうううつ! びゅぶ、びるるるううッ!

「おふおおう!」

「っひいいいあああつ! 汚いのが顔に、髪にかかっているウウッ!」

射精の瞬間、堪らず吐き出された肉棒から凄まじい勢いで男の劣情が炸裂する。ぶちまけられた牡の濃厚濁液は、瞬く間にだらしなく潤んだ顔面を真っ白に染め上げた。

男はしつこく震える肉の凶器を頬に、半開きの唇へと擦りつけてくる。その都度小柄な少女の肉体は、牡の欲望汁から与えられる灼熱と密度の高い臭気とに歓喜の震えを奔らせる。思考は奪われ、もはやただただ牡の体液を欲しがる淫蕩の牝へと成り果てていた。

「はひいん……勿体ないのおっ。口の中に、ちっちゃなお口に飲ませてよ……ッ！」  
いまだに萎えぬ強欲な肉欲棒を、飽きもせず少女淫婦は舐めしゃぶり続ける。顔にこびりついたものも、喉に残る恥垢も全て躊躇なく嚥下していった。血を欲する喉の渴きを誤魔化すため、呪われた乳肌から絶えず送られる疼きを癒やすために――。

「ねえクオン。貴方の元ご主人様は本当に浅ましくてイヤらしい女ですわね……んんっ」  
目と鼻の先。汚され続ける少女のすぐ傍らで銀髪の女吸血鬼が微笑んだ。そして見せびらかすためにゆつくりと、腕の中の、虚ろに吠える少年の首筋に鋭い牙を食い込ませる。

――ずぢゆるううっ……。

「ううう……ふあ……ああ……マ、リー……」

(すまぬ、クオン……許して……！)

か細く途切れる少年の吐息が耳元で反響する。快楽に飲まれた少女の胸にチクリと嫉妬と羨望の想いが溢れ返る。――私も、クオンの血を吸いたい。だが、彼女の前に差し出されるのは薄汚れたカチカチの肉勃起のみなのだ。

「おっ、おお！ 俺ももう出そうだぜえっ」

男が乱雑に腰を突き入れると、少女の口端から唾液と混じって泡立った牡の体液がダラダラと糸を引いて零れ落ちてきた。もう何人目になるのか。諦念した幼い肢体にこれまでの鬱積した激情をぶつけるかのように、入れ代わり立ち代わり連中は小さな唇に肉棒を突

き込んだ。これまでに相手した肉勃起は全て少女の矮小な口内で精を解き放っている。

「くそつ、さすがは淫乱で名高い女伯爵だつ。くくうつ、もう持たねえ！」

「……あふうつ、また、臭いの出されてしまいう……じゆるうつ！　じゅぽぽおッ！」

——どふうううううう！　ぶびいっ、どびびゅびゅうつ！　どぶどぶんッ！

少女吸血鬼の卓越した舌技。新たな性感帯として開発された牙に自ら肉棒の突端を擦りつけ、その刺激で悶える男根を逃がすまいときつい唇を余計に窄める。今度の男も、腰を引き抜く余裕すらなくチロチロと這う舌に促されるままに縮こまる牙目掛けて灼熱の牡汁を撃ち放った。

（んああ、苦いのが牙に引つかかっている……男どもの熱くて臭い汁で穢されてえ！）

牙での悦楽に陶醉する少女吸血鬼の耳にしわがれた声が響く。緊張でもしているのか、はたまた高揚のためか。その声音は震えていた。

「クク。お前が誰の所有物であるか、皆の前でも見せしめておかねばな」

牡の臭気溢れる汚濁に浸かり、うな垂れる娘の眼前に最後の客。宴の主権者である男爵が仁王立つ。当然硬く膨らんでいた股間を他所に、汚れを気に留めずに小さな供物を抱いた男爵の唇が幼く細い首筋へと接着する。

「はくう……ッ！　ひあ！　あつ！　ひはあああアン……ッ！」

「んぐつ……ぢゆるうう……甘露な味いだつ。ぢゅぶ、ぢゆるる……クハハ、我は今此



処に宣言する！ 『魔の紅玉』 ローズマリーを娶ることをッ！ んむぢゆるるうッ！！』

オオオオオオオオ！ 湧き上がる歓声。声高に叫び、男爵は心ゆくまで舌鼓を打ち、まろやかな少女吸血鬼の血液を長時間にわたって味わう。

(あ、ああ……もう、耐えられ……ない……)

吸血による快感と再びもたげ始めた喉の渴きに身を焦がしながら。マリーは肉体に穿たれた呪いに悶える。その耳には、いつまでも鳴り止まぬ同族たちの歓声が響いていた。



(それでは……私がこの男をあしらったせいでも、それだけのためにクオンの家族は……)  
愛する少年の両親の死に、自身が関わっていたという事実。突きつけられた真実に真紅の眸は潤み、膝がガクガクと震える。打ちひしがれ俯く彼女の心は、完全に絶望で塗り込められてしまっていた。

「無論あのガキも知っておるぞ。貴様のとばっちりで己の親が殺されたのだとな」

「……ッッ！ そ、んな……」

「ほおれ、見てみる。あそこで跪く、我が妹に身を捧げた哀れで矮小な人間の姿を」

男爵の言葉に促され、マリィが振り向いた、その先には――。

「クオン……随分と上手になりましたわね。みっともない包茎ペニスをそんなにいきり立たせて、フフ。本当に惨めな子……」

「ちゅびつ、んぢゅぱあつ、ぢゅちゅうううう……」

いつの間にか戻ってきたイメルダの股、切れ込みの深いドレスを捲り上げた脚の間に、膝立ちとなった栗毛の少年の頭が吸いついている。顔は見えなかったが間違いなくクオンであると、マリィは確信していた。卑猥な音が響いているのは、彼が舌で銀髪の女吸血鬼に奉仕しているからなのか――。

(クオン、お前は悔しくないのか？ その女はお前の親の敵であるベイリアの、実の妹な

のだぞ……？　なのに、どうして……ッ)

女主人の股間に脇目も振らずに舌を這わせ続けるかつての従者に、困惑と嫉妬の感情が次々と湧き起こってくる。

「毎日、血を吸いながら仕込んであげた甲斐があったわ。うふふ……あら、前のご主人様のご執心な目つきで見えてましてよ、クオン？」

「……ッッ！」

一瞬、ほんの一瞬だけ小柄な肩がビクリと震える。それ以上の反応を示すことはなく、また少年は寡黙な奉仕行動へと戻ってしまった。その背中の中の向こう側で墮ちたヴァンパイアを嘲笑う、銀髪から覗く鋭く冷淡な目つき。

愛する男が他の女と密な時を過ごす。見るに耐えぬ行為から逃れるように目を背けた紫髪の女吸血鬼の胸を、かつてない敗北感が漂う。惨めに穢れた自分を一目も見てさえくれなかった少年従者の背中を切なく見つめる紅玉に、悔しさと寂しさから涙の膜が滲んだ。

(私が……私のせいで父母が殺された……だから怒っておるのか、クオン……？)

未練を残すように再び上がりかけた視界の淵に、ニタリと笑う男爵の牡勃起。力の抜けた掌で塞ぐことも叶わぬ鋭敏な耳には、はつきりと奴隷の少年が女主人の股間にむしゃぶりつく卑猥な淫音が聞こえてきていた。

「ちゅぱっ、ちゅちゅるる……ふわぁ、んむむうっ、ちゅ、ちゅっ、んろろろおっッ！」

「あはア……いいわよお。そう、そうやって従ってさえいれば……んフ。血も吸ってあげますし、こうやって……ネッ！」

——ぐりイッ！　ぐつ！　ぐりりイイイッ！

「んぐう……ッ！　んっ、んんっ、ぢゅりゅりゅうう……ッ！」

ハイヒールの踵で剥き出しの包茎ペニスを踏みにじられ、少年は涙を主人の茂みに擦りつけるように首を振りながら奉仕を続ける。彼の目には今、主の潤んだ淫裂しか映されていない。自分の唾液でべつとりと濡れたそこに舌を這わすことだけが少年に唯一許された行為であり、欠かすことの許されぬ義務なのだ。

股間に奔る痛みを振り払おうと、ただひたすらに彼は銀色の茂みに顔を埋め続けた。

「クオ……ン……。何故……私はお前のために……そのために今まで我慢してえ……っ」

これまで必死に耐えてきたのは決してプライドからだけではない。クオンを助け出す。愛を認識したあの日から、それが女伯爵の心を支える一番の想いとなっていた。

「クフフ、さあひとしきり絶望したところで、俺のモノを掃除してもらおうか。貴様に種をつけた、そしてこれからも永劫に種を仕込む大事なモノだ。丁重に扱え」

絶望し抵抗する気力を削がれた女吸血鬼を待ち構えるように、極太の肉勃起が再び突き出される。呆然と見つめる唇を易々割り、硬い突端が生温かい口腔へと吸い込まれた。

「んんう……ッ！　はむっ……ちゅ、ちゅばあっ」

——もう、いい。諦めの心境で口内の侵入者に舌を這わせれば、苦く粘る味わいがじわりと染み渡る。それは、物悲しくも甘い痺れを成熟の肉体にもたらした。

(ちんぽ舐めるの気持ちいい……くさあい汁のこびりついた勃起ちんぽお……)

口中に溜まる唾液との混合液を飲み込むと、たちまちに堕ちた身体が疼き出す。赤く腫れて火照る尻を、乳頭のすぐ手前まで迫り上がってきている母乳を今にもひり出してしまいいそうな双乳を弄る余力もなく考えることすら放棄して、差し出される肉棒へと愚直に舌と唾液を絡めた。

「精液カスの一つも見逃さずにしゃぶれ。そうすればまた太いペニスで貫いてやろう」

男爵が何かを言った気がする。だが、マリーの心はただ一つの事柄で埋め尽くされて、それに聞き入る余裕はない。ぽやけた思考が唯一認識できる感情、快感に伴う甘い痺れだけを求めて、喉奥を叩く剛直に舌を這わすのだ。

「んふア、んはあつ、れるれるるおお……ッ！ んぐウンン〜〜〜！」

一旦外れたタガは、一気に加速して媚体を昂らせる。

絡めた舌にはたつぷりの唾液を乗せ、ヌルヌルと幹に擦りつけては舌の裏側を使って撫でるように丹念に塗り広げる。喉元にぶち当たる龟头を受け入れるように、唇と連動して喉も引き締めてやる。剥がれ落ちる精液カスは、言われるまでもなく全て味わってから嚥下する。全ては牝の体液を得るため。刺激されて鳴いている牝の媚肉を慰めるためだ。

「ぐぬう、さすがに……慣れたものよな。おおっ……もつとだ。激しくしゃぶれッ！」

「むぢゅうウウッ……んぶつ、ぢゅずるるるううウッ！」

グングンと硬度を増し膨張し続ける牡器官を突き入れつつ、男爵が吠える。言葉で理解する以前に口中の牡肉の状態で興奮を読み取り、女吸血鬼は一層口淫に没頭していった。

（硬いのがッ、私の奥にいっ……くああ、喉が渴くのッ、お乳が疼くのおおおッ！）

快楽は同時に、耐え難い渴きと疼きをもたらしてしまふ。新鮮でなくてもいいから血が欲しい。誰でもいいから乳を搾って欲しい。飢えた身体が、なりふり構わずに鳴いていた。

——もう、我慢なんてしたくない。快感に忠実に、何も考えずに身を任せればいいのだ。クオンが、そうしたように。

開拓されたばかりの性感帯である牙を男の抽送に合わせて肉幹に這わせ、こつてりとこびりつく白濁カスを剥がし取る。舌の上に乗せたそれを溜められるだけ溜めてから嘔下すれば、艶かしく紅色の舌が蠢き、ゴクリ、と汚物を流し込む喉の音が鮮明に響いた。

「んりゅりゅ！ ぐぼっ！ んはあおお……ンッ！ あハア、おいひイイッ！ おちんぼのカス、おちんぼの匂い、おちんぼの味イッ！ 堪らないのおおお……ッ！」

唇をめくる激しい出し入れのたびにブジュブジュと反芻され泡立った唾液が、ボタバタと零れてシーツを汚すのもお構いなしに、かつては畏敬の念をもって恐れられた薄紫の髪を乱して男の腰にすがりつく。四肢が自由になったならば、肉棒の下方で窄まっているシ

ワくちやの玉袋にまで食指を伸ばし、さらなる悦楽で男を射精へと導いていただろう。

「く、おうう！ 何たる吸いつきだっ……また口で出させようという腹積もりかッ」

凄まじい吸引に、男爵は我慢することなく快楽を貪り、思う様温かくぬめる口内へと腰を突き込んだ。受け止める牝奴隷と化した女もまた、牙と舌を犯される極上刺激に身を震わせ、舌先にじわりと広がる苦みばしった味わいに意識を飛ばされそうになる。

男の腰が小刻みに震える。最後の時が近いのを舌と牙とで敏感に感じ取り、喉の奥まで啜え込み縮んだ牙先を懸命に肉の幹に押し当てる。そのまま激しく頭部を揺さぶった。

「びゅじゅりゅうっ！ つぼあっ！ はひゅう……ひんぽおっ……んんぶぶううううっ、ぢゅりゅっ、ぢゅばぢゅばあああッ！ ぐむむううううンンウッ！」

「おっ、おお！ ……ぐぬうううう！」

——どぶどぶどぶうっ！ びゅぶぶるうっ！ びゅっ、びゅぐぐううううッ！

「んんぐうううっ！ ぐじゅっ！ んじゅるっ、んはアッ……！ はあん……出たア……せいしイッ……しえいえきイイッ！ ぐぶっ、ずぢゅりゅりゅりゅりゅうううッ！！」

射精の瞬間、再度深く肉棒を啜え込み、より白濁液が飛び散るように先端を牙先で刺激する。男は喉を反らし、たわわな二つの柔肉に指を食い込ませて歓喜の刺激に感じ入る。精を浴びた女もまた、ようやくの馳走に舌鼓を打ちながら腰を震わせた。

「くはおお……はあ、はあ。首を出せ。また血を吸ってやるぞ。……んぢゅっ！」

——ぢゆる、ぢゆるずうっ……。

哀切と被虐の入り交じった顔の花嫁の首筋に牙を突き立て、使命を終えた肉棒をたつぷりの白濁液と唾液で潤む粘膜に遊ばせて。男爵は情事の後の一服を心ゆくまで楽しんだ。

(また血を吸われて……喉、渴いちゃう。もう、もう耐えられない……)

霞む視界に下卑た笑みを貼りつけた男の顔を映し、マリーは折れた心根で嘆く。

——びゅぶる……。

力を抜き前のめりに重く圧しかかってくる男爵の腰が、最後の一滴までを搾り出そうと口内でモソモソ動くのを、女ヴァンパイアはただ呆然と受け止め続けていた。

「マリー。貴方、本当にお兄様のことを愛していて？」

荒い息と獣欲が充満する聖堂に突如冷たく怜悯な声音。ぼやける女伯爵の視界に割り込んできたのは抱き抱えた栗毛の奴隷に吸血をし終えた銀髪の女。幾度か絶頂にも至ったのか、蒼地のドレスの切れ込みから覗くガーターで飾られた脚にまで蜜液が滴っていた。

「どうした、何を言っておるのだイメルダ」

「貴方、本当に恋しい殿方がおられるのでしたら、この場で言ってしまった方がよろしくてよ？ どうせ……もうすぐ、お兄様の子を孕んでしまうんですもの」

口に残る血糊を舐めながらの兄の訝しむ声を完全に無視し、歩み寄ってきた妹吸血鬼が

耳元で陶然と囁く。その言葉に、マリーの胸中にすぐさま思い浮かんだのは、ただ一人。大聖堂の冷たい床に打ち捨てられたように寝転がされた、栗毛の少年の名前だけだった。

「ク、クオン……私は、クオンをつ、あの少年を心から……愛して……おる」

それは許されざる想い。けれど誤魔化しようのない想いだ。震える声音で、しかしはつきりと、夜毎思い出すたびに胸が疼いた少年の名を呼ぶ。この時ばかりは意識を奮い立たせ、熱い胸の内を男爵兄妹にはなく意中の少年に聞かせるように凜とした声で告げた。

「だ、そうですね、お兄様。これではとんだ道化ですわね」

「な、なんだと……イメルダ、一体何を……！」

「そうですね。皆の前で契りの宣言をしておきながら、あつさりと振られておしまいになるなど。『誇り高き吸血種』として、何らかの責任は取らざるを得ないのではなくて？」  
かつての仇敵の口癖を真似し、イメルダが呆然と裸体を晒す兄へと容赦ない詰問を浴びせかける。その眸が勝利の悦びに歪んでいるのに、男爵は事ここに至っても気づけない。ただ、傍から見て滑稽なほどにうろたえ、狼狽するのみの愚鈍の兄。

しかし、脱力する紅眼の持ち主、マリーだけはようやく事の全容に気づいていた。男爵さえも騙され、妹の掌で踊らされていたに過ぎぬのだ。哀れな愚者である兄は歪んだ愛憎を妹の策略の通りに狂わせたのだと――。

「謀ったのか、実の兄である俺をッ！ イメルダァッ！」

「あら人聞きの悪いこと。全てはお兄様の不徳が招いた結果ですわ。ねえ、マリーさんも  
そうお思いになるでしょう?」

(全てはこの冷血女の思い描いたまま……か)

白銀の髪から覗く冷酷な瞳で見下されても、何故かそのことに対しての憎悪が欠片も湧  
き起こらないのは、もはやそうするだけのエネルギーさえもないからなのか。もしくは胸  
中のどこかに、見事な謀略を描き、ここまでそれを隠し通した銀髪の好敵手への賞賛の意  
があつたからかもしれない。

他族、それも格下と見なしている人間などに心奪われたマリーを同族の連中は放つては  
おかないだろう。先ほどの告白によって彼女は伯爵としての地位も吸血種族としての誇り  
も、全てを同時に失ってしまったのだ。

「恐らく、爵位は返上。そういうことになるでしょうね。お兄様も、そしてこの女も」

返上された男爵位の行く先——まずは血族が優先される社会で、自ずとそれは銀髪の女  
吸血鬼に行き着く。己が確固たる地位を得るためだけに、彼女は実の兄を陥れたのだ。

「ぐ、ぐうう……よかろう。だが、この女の処遇だけは俺に任せてもらうぞ! おい!」

もうじき前男爵となる運命のベイリアが、礼拝席の最前列に陣取っていた取り巻きの中  
でも位の高そうな男に顎で合図を送る。男は慌てて立ち上がり、一つの瓶を持ってきた。

「この淫売め。全て貴様のせいだ。これで……この魔の生物でお前のエナジーを根こそぎ

奪ってやろう。……ゆけい！」

——バリーインッ！

盛大にひっくり返され割れた瓶の中から、一对の掌大の塊が這い出てきた。ヌルつく表皮に幾多の吸盤。まるで蛸のようなそれはシーツをよじ登り、身動きの取れぬ女虜囚の乳肌へと這いずってくる。

「はひゃあぁッ！ き、気持ち悪いッ！ ヌルヌルがくつついて……はひィィッ！」

「クク、そやつは例の乳液で餌付けしておつてな。似た成分の母乳にも目がないのだ」

上気する左右の乳肌にびっちり貼りついたそれぞれの蛸触手は、吸盤から吐き出される粘液を塗り込めながら、着実にある部位を這い上ってくる。桜色の突起——母乳をたつぷりと詰め込んだ乳頭、ふつくと飛び出した部位にとうとう触手の口腔が吸いついた。

「ひぎ……ッ!? い、いひゃあぁあぁッ！ チクチクがお乳に入ってくるうううッ！」

蛸触手の口腔にびっしりと生えた鋭い牙が張りのある乳肌、さらには乳頭に点在する乳腺にまで食い込み、ミルクを搾ろうと蠕動運動をしている。

耐え難いほどの痛苦と不快な感覚はほんの一瞬で、呪縛の母乳を捻り出されることですぐに最高の快楽へ取って代わった。胸の奥に滞留していた熱源を放出する解放感とそれに伴う媚薬の如き魔性の甘美感とで、女吸血鬼はグズグズに蕩かされてしまう。転げ落ちぬようにシーツを掴んで、まるで芋虫の如くベッドの上を転げ回る。

「んんはあアア……はおおおっ！　ちゅ、チューチュー吸われてるウウウンンッ！」  
乳を異形の力で強く吸引されるごとに電流が奔ったような鋭い刺激を感じながら、倒れ込んだベッドのシーツを引き寄せて股を擦り合わせる。モジモジと擦れる脚の間では、先ほどたっぷりと吐き出されたばかりの男の白濁汁が糸を引いて大量に溢れ出していた。

「ふんっ、締まりのない売女がッ。このような節操のない穴に、これ以上用はないわ！　そうだな、俺はこちらを……家畜に相應しく、穢れた尻穴を穿ってやろう！」

「ひ……ッ、お尻……熱いのが当たって、るう……」

無理だ——大きすぎるベイリアの勃起肉に、真っ先にその言葉が思い浮かぶ。ソコで性行為を行うこと自体は初めてではない。だが、今まさに尻肉の窄まりに宛てがわれた巨大な異物を、矮小にすくみ上がる穴で受け入れられるとは到底思えなかった。押し当てられた灼熱から逃れようと腰を振ってみたが、結局は徒労に終わる。

「お兄様が使わないのなら、前はこの子にあげてもよくて？　さつきからもう待ちきれないみたいに、小さな包茎クンを膨らませてしまっているのよ」

顛末を見届けていた女吸血鬼がおもむろに口を挟む。ずい、と銀髪を振り払った掌が押し出したのは、全裸に首輪と形見のペンダントのみを着けた栗毛の少年。クオンだった。

「構わん……どうせそやつを使い古した淫売な穴だ。ククッ、俺の子種で満杯の穴が使いたいというのなら、勝手にさせてやるがいい……！」

興奮しているのか、余裕を滲ませつつも上ずった男の声音。荒い鼻息が薄紫の髪をなびかせる。遅れて貼りついてた腰がうつ伏せの女囚の尻谷へと一気に押し込まれた。

「いぎゆうううううッ！ はぐ……んんんおおおおお……ッ！」

これまでに比せぬほどの圧倒的な拡張感。本来は性交に使用しない不浄の狭穴を押し広げて、興奮し膨張しきった牡肉が押し入ってくる。持ち主の激昂を表すように、そのサイズは過去に口や膣で啜え込んだ時以上に膨れ上がっていた。

「そおら、次はあの小僧のモノを啜え込むのだぞ。嬉しかろう、んん？」

「くひいいいいン！ お腹押されてるっ、内側からごりゆごりゆきてりゆうううッ！」

男に髪を掴まれ、ふらふらとこちらに歩み寄ってくる少年奴隷の姿を見せられる。夢遊病者のように虚ろに開いた眸にはかつてのような生氣は感じられず、少し痩せこけた頬のせいで精悍な顔付きにも見える。そして、ダラダラとだらしなく涎の吹き零れる口端からは鋭く伸びた二本の牙が覗いていた。

（半吸血鬼化……。飢えた獣にされてしまったのか、クオン……ッ！）

獰猛な獣を思わせる視線で、かつての従者が襲い来る様をマリーは腹を抱えて悶絶しながら哀しさを交えた眼差しで見つめていた。私のせいだ。自責の念が渦巻いてまともに彼の顔を見ることができない。

「何をしておる。早く股を開いてやらんか。ガキが困っておるぞ、ほれい！」

「ひっ、いひゃああっ……」

イヤイヤをするのを無視され、ベイリアの手によって大きく開かされた両脚をそのまま抱え上げられる。背後から大股開きで抱えられた体勢、子供が親に小便を手伝ってもらった時の体勢。それは、幼い肢体を弄ばれた時と同じであり、あの忌まわしい儀式を、呪われた胸の内から喚起させた。

「あの時に、気づくべきだったのだ。お前が真性の売女だということになッ」

それは男も同様だったようで、感慨深げに背後の男爵がつぶやく。己に対する悔恨と、辱めた女に対する侮蔑。全てあの時に。そう漏らす男の言葉に、捨てきれぬ諸々への未練が押し込められて詰まっている。

「うう……マ、マリーのオマ○コ……臭い汁をいっぱい出されてる、使い古し……」

ゆらゆらと左右に身体を揺らしながら、小柄な身体がゆっくりと醜態を晒す女の下へと近づいてくる。閉じることを忘れたように開いたままの口は、何事かをぶつぶつとつぶやき続けていた。

「くう……クオンツ……。やめてくれっ、それ以上、言わないでえっ！」

彼は先ほどのベイリアの言葉を反芻しているに過ぎない。ほとんど意志がないであろう虚ろな眸を見てもそれは明らかだ。頭ではそう理解できていても、傷つけられた心が悲鳴を上げる。何よりも、変わり果ててしまった少年の口から、変わらぬ声音で紡がれるのが

辛かった。

「それ、お待ちかねの結合の時間だッ！」

ベッドの上で高々と生け贄の如く捧げられた女吸血鬼の股間に、膝立ちで上がり込んできた少年の肉棒が密着する。イメルダによる調教過程で引き伸ばされたのか、随分と面積を増したたるんだ包皮。隆起してもなお肉幹の半ばまでを覆う皮の感触が、濡れた股座と擦り合わされる摩擦の中で奇妙なアクセントとなって囚われの虜囚を苛んだ。

「くっ、クリクリするのはいやあッ！ はくううんッ、もう擦らないでえええッ！」

急いた少年の遮二無二押し出される包莖が、溢れるほどの蜜で濡れた恥丘の上を繰り返して滑る。その都度海綿体の硬度と包皮の柔らかさを併せ持つ龟头で肉芽を擦られ、ヴァンパイアの肉体を凶らずも肉欲の波に押し上げていく。もどかしい刺激の中、彼女の腰は無意識にクイクイと揺らされ始めていた。

「ぬぐっ……くそっ、まどろっこしい奴めッ。女の穴も分からんのか。ココだ、この穴にその貧相なモノを押し込むのだ！ そらあッ！」

挟まれる形のマリーが腰を揺すれば、当然アヌスを刺し貫いた背後の男爵にも刺激が伝わる。つるりとした腸壁が小刻みに締めつける中で、腰振りのたびにみっちり埋まった腸内粘膜に龟头が擦れる。我慢しきれずに、男爵が抱えた女の秘洞を少年の猛る包莖ペニスへと押し被せた。

——ずッ……ずぶぢゅぢゅうううううッッ！

「んぐう！ いひゃいひゃいひゃいッッ！ ク、クオンッ、クオンンウ……ッ！！」

後ろの穴で強大な異物を啜え込み、両穴の間の壁を押し込むほどに圧迫されているところに二本目の肉棒が突き込まれる。余った包皮がめくれながら潤んだ秘裂に押し入るところを、マリーはつぶさに観察し悦びの声を上げた。

首に腕を回し、体重を預けて抱きついた彼の身体はとてつもなく熱く、火照りきっている。人よりも体温の低いヴァンパイアにしてみれば、焼けるような熱っぽさだ。それでも愛する少年との結合を果たした悦びを示そうと、懸命に力の入らぬ四肢を小柄な身体に絡めてしがみつく。

「ちっ、人間などにほだされおって。この、恥知らずがッ！」

「はひいつ!? はおっ……おおおはアアアッッ！ お尻いつ、お尻裂けるウウウッ！」

一瞬で甘美な安らぎから、暴虐の、しかし耐え難い鬱屈した悦樂を孕んだ快感地獄へと墮とされる。叩きつけられる恥骨のせいで真っ赤に腫れ上がった尻肉の痺れも、開発された肉体にとってはこの上ない甘い刺激へと変容した。

さらに、刺激で目を覚ましたかのように、乳房に貼りついた蛸触手までがその活動を活発にする。腰から伝わる甘い痺れに伴い噴出した乳汁を、腹の空いた赤子のように、けれども尋常ならざる吸引力をもつて乳腺から直接吸い上げるのだ。

「おひいひいいんンッ！ 熱いっ、お乳の奥が熱いのおおッ！ んんおあああ！」

「はあ、はああ……マリーのオマ○コ、他の男に使われた……淫売……穴ッ」

双乳から立ち上る震えと痛いほどの鋭い痺れ。途切れることなくそれらの刺激を導き出す蛸触手の繊細な責めに、二人の男にサンドされた肢体は幾度も絶頂へと昇り詰める。

それにはお構いなしに、相変わらず蔑みの言葉を繰り返し、虚ろな眼差しで主だった女吸血鬼を一瞥もせずにとだひたすら栗毛の少年奴隷は腰を動かし続けていた。ズンズンと強引に、相手のことを考えぬ無茶苦茶な動きで突き込まれると、膣内粘膜が擦れてしまう。それでも大量の潤滑油、主に女吸血鬼の漏らした愛蜜を得て、牡牝両方が今までにない強烈な快感を腰骨から受けていた。

「クオン……激しい……ッ、もつとやさしくうっ……あひやああんンッ！」

懇願を無視して突き込まれるたび、乳からの刺激で跳ね回る肢体が、さらに激しくうねり狂う。両の乳房から噴き出ているはずの大量のミルクは、びっしりと貼りつき突き込まれた蛸触手の牙によって貪欲に飲み干されていく。どうせならば、クオンに飲んで欲しかった——虚ろな思考で、そんな埒もない想いを巡らせもした。

「ククッ、獣同士がじゃれ合いおつて。貴様らに相應しい、実に下品な交わりだッ！」

激しく尻肉を叩き肛門を抉るベイリアが、嘲りの声と共に蛸触手ごと乳房を鷲掴みにする。

「はぁおっ……おひりいいいいンンンッ！ んんはっ、ひぐふううううッッ!!」

途端に搾乳の喜悦に打ち震える乳肉。ぶつくりと膨らんだ乳頭、その桜色の色素内に点在する乳腺から、一齐に母乳が飛沫を上げる。そして、片っ端から蛸触手の口内に吸引されていった。胸の感覚がなくなるほどの、強烈で甘美な刺激に喘ぐ女ヴァンパイアを顧みて、視界の向こうに映るイメルダが含み笑いを浮かべたような気がする。

きつく窄まった腸壁で男の肉棒が筋を浮かせるところまで感じ取り、抉り込まれるたびにめくり上げられる媚肉から濃密な蜜を垂れ零す。

(あぁ、クオンも、クオンのおちんぼも興奮しているう……!)

身体中のあらゆる部位が淫靡な牝肉で成り立つ、牝の肉で擦られれば、いや濃い臭気を嗅ぎ取っただけで感じ入る下賤の牝奴隷。肉体も、そして精神までも墮ちるところまで墮ちきってしまったているのだと改めて実感する。

「はぁ、はぁぁ……マリーのマ○コは……ヌルヌル……」

「いひゃあっ！ クオン、そんな風に言わないでえ……見ないでクオンッ！」

虚ろに喘ぐ少年もまた、決して腰の動きを止めることはなかった。身体を預け下腹をピクピクと痙攣させるマリーを、乱雑な抽送で突き上げる。以前の少年ではあり得なかった強引で自分勝手な動きに一抔の哀しさを感じながら、けれどそれゆえに女吸血鬼の情欲はより掻き立てられてしまう。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**